

陳壽の諸葛亮傳

土田龍太郎

晉の陳壽、三國志の撰者なればその名世に弘く知られたり。晉書卷八十二に載れる陳壽傳、すべて四百字にも足らず、さまで詳しからねども、その人となりといさをし、ことに史籍修撰に携はれるさまを敘べてほぼ缺くることなし。

陳壽巴西安漢の人なりしかども、蜀亡びて後しばしありて晉に仕へたり。蜀相諸葛亮集を奏上せしは湯平令たりしころなれども、ほどなく著作郎に除せられて三國志を撰修せしこと晉書本傳には左のごとくに敘べたり。

撰魏吳蜀三國志凡六十五篇、時人稱其善敘事有良史之才。復侯湛時著魏書、見壽所作便壞己書而罷。帳華深善之、謂壽曰當以晉書相附耳。其爲時所重如此。

夏侯湛のことはともかくもあれ、博學識見並びなく晉一代の典章草定に勲ありて王佐の才を謳はれし張茂先にかくまで讚へられし陳壽の史筆のただならざりしこと思ひはかるにたへたり。さはれ時の人陳壽をこそぞりて賞めののしりしのみにてあらざらず、陳壽の筆の直からぬあとを見とがめむとせしともがらはた少からざりしがごとし。さるは魏に盛名ありし丁儀丁廙のために魏書に傳を立てずしてやみぬるは、陳壽の米千斛の賄まひなひを求めしかども丁氏の拒みて與へざりしがゆゑなること同じ本傳に記せり。はたしてしからは陳壽の心術つねにいさぎよかりしとはなかなか云ひがたかるべし。

漢朝興復のために身命を惜しまずつひに五丈原の陣中にみまかりしかの諸葛亮孔明、その神機妙算測りがたくつねに人智のほかに出でしかば、古へ今に雙びなき軍師とて世の人のひとしく仰ぎ尊びきたれるは今さらに云はでもありなむ。しかるに三國志卷三十五諸葛亮傳に添へる評語にて、陳壽の孔明につきてくさぐさのこと記せしそのすゑに

然連年動衆未能成功、蓋應變將略非其所長歟。

と云ひてとぢめたる書きざま、孔明をいささか貶るやにも見ゆれば、むねと羅貫中の演義に親しみて孔明のことをひたすら仰ぎ慕へる世のおほかたのものにとりては、まさに思ひのほかにてことさむる心地さへそふめり。

かつて街亭にて蜀軍の魏軍に負けしをり、敗將馬謖の參軍たりし陳壽の父また孔明に罪せられたり。されば陳壽の軍略のさまで勝すくれたらぬをにほはせるは、もほら私の怨みによれりと思ひなして陳壽を輕しむるともがらのこころありければなるべし。このおもむき晉書本傳にては、丁氏のことに加に續けて左のごとく敘べたり。

壽父爲馬謖參軍。謖爲諸葛亮所誅、壽父亦坐被髡。「中略」壽爲亮立傳、謂亮

將略非長無應敵之才、「中略」議者以此少之。

唐の劉知幾の史通卷七の内に曲筆といへるところあり。

班固受金而始書、陳壽借米而方傳。此又記言之奸賊載筆之凶人。

と記して陳壽の修史の卑陋なるを言ひくたせることただならず。

しかるに世下りて清の王鳴盛、その十七史商榷卷三十九にて、すでに述べし丁儀丁廙のこと、また陳壽の諸葛評を時人の批議せしことゆゑをつばらに勘ふるにあたりて

晉書好引雜記故多蕪穢此亦其一也。

と記せれば、晉書に載れる陳壽誹謗の記事いづれも妄説にて採るにたらずと思へるがごとし。

劉知幾と王鳴盛とおのがじし陳壽につきて云へること右の如くなれども、いづれ中れりや、ここに定めむによしなきはさることなれども、陳壽はいささかも曲筆なかりしとはさすが思ひがたきなり。

清の趙翼、その廿二史劄記卷六の内にて陳壽三國志を批議せることいともつまびらかなれども、三國志多廻護といへる一節ありて、撰者の曲筆廻護とおぼしきところいとあまた拾ひ列ねたり。司馬氏のために廻護せるあとことに多しと云ひつつ、趙翼さらに陳壽論諸葛亮といへる一節を設けて蜀書諸葛亮傳のことくさぐさ論へり。この趙翼、王鳴盛とは同じからず、父のかつて罪なはれしを怨みたる陳壽、孔明のことを絞ぶるにことさら筆を曲げたりと思ひて疑はず、陳壽の史眼の拙きに説き及びたること左のごとし。

壽於司馬氏最多廻護、故遺懿中慚及死諸葛走生仲達等事傳中皆不敢書而持論獨如

此。固知其折服於諸葛深矣。而謂其以父被髡之故。以此寓貶、眞不識輕重者。

諸葛亮すでにみまかりぬれどそのあらかじめまうけおきし計りごとに司馬懿のたばかられ、遠かたにたちまち現れし生けるがごとき孔明の木像に惑ひ驚きて、魏軍さながら遁れ走りぬるさま羅貫中三國志演義第一百四回につばらに語りたり。死諸葛能走生仲達といへるこのことの始め終り、知らぬものとはまれなるめれど、蜀書諸葛亮傳にはこの句さらに見えず、孔明陣歿のこと、そのいみじき計りごとにはつゆ言ひ及ばで、わづかに左のごいとも言短かにてやみたれば、飽かずおぼゆることよなし。

其年八月亮疾病卒于軍。時年五十四。及軍還宣王案行其營壘處行、曰天下之奇才也。

宋の元嘉中に成りし裴松之の三國志註に引ける晉の習鑿齒の漢晉春秋の一節にて、孔明陣歿のころの魏蜀兩軍のありさまを述ぶることやや整へれど、その間に

宣王之退也百姓爲之諺曰死諸葛走生仲達。

と記せり。この俚諺、唐初に房玄齡等の撰修に成りし晉書宣帝紀にも見ゆるは、漢晉春秋より採れりしにてもやありけむ。

諸葛亮すでに死すれどなほあらかじめまうけしたばかり謀もて司馬懿を惑はし惱ませしさま、羅貫中の語るほどめざましかりけむとはさすが思ひにくけれども、このとき逃げ走りし仲達のあさましかりしこと云へるはあながちはいくまん稗官者流の漫り言のみにてあらずかし。

習鑿齒の引ける死諸葛走生仲達てふ俚諺、晉の世になほ蜀の百姓の間に傳はりたりとせば、陳壽この俚諺のことつゆ知らざりきとはさらに思ひがたし。すなはち陳壽の司馬宣帝のために諱み憚るところあり、その見苦しき遁走のことあへて載せじとておのが諸葛亮傳よりすべて省きしにほかなかるべし。

そも司馬氏の世にありてそれにすぐに先立てる三國隆替のありさまをさながら論はむはたやすきわざにてはよもあらず。すでに著作郎となりて晉廷に仕へゐたりし陳壽、司馬氏のために忌みて記さざることありしとはげに避りさがたきわざともや云ふべき。曲筆の厭ふべきはさてもこそあれ、省筆は必ず深く咎むべきにしもあらずかし。

されば陳壽に曲筆省筆たえてなしとこそは云ふまじけれ、今その蜀書諸葛亮傳を一わたりけみするに、私の怨みもて記せりとおぼしきところさらに見あたらず、諸葛亮の世に及びなき天資性行をよく傳へ、一期の功業と無比の誠忠をつぶさに叙べてほほ餘す子となければ、さながらその人にうつつに對ひみたらむ心地さへつりて、孔明ただ才知の輩ならでまことの經綸の人なることおのづからに悟りうべし。陳壽の書きざまことに勢ひあり、げに諸葛亮のために椽大の筆を揮ひたりと云ひつべけれども、これみづから諸葛亮の人となりを目ごろ仰ぎ慕ひてやまざりけるがゆゑなるべし。諸葛氏集を輯定せしときの陳壽の上奏、同傳に載りたれどもこれためたきことよなければなほざりに讀むまじきにこそ。

すでに引きし亮將略非長無應敵之才てふ評語のことせめて一たびばかり勘へでは濟むべからず。孔明漢中に在り、建興五年より十二年までおよそ七年の間しきりに蜀軍を率て魏軍と戦ひしかどもつひに長安を陥さでやみたり。そも漢中と長安とさしも距らず。されば孔明の軍略に缺くるところはたいささかもなかりしやいなや、陳壽の心にかく疑ひいぶかしむ思ひのかつてきざせりとするもそのことわりさらになきにもあらず。されば將略非長と記せるはかにかくに思ひはかりしすゑに陳壽の至れる一見識なりと云ふをうべし。これに抗ふがごとくに

加以衆寡不侔攻守異體、又時無名將故功業陵遲、且天命有歸不可以智力爭也。

といひて、もはら天運の孔明に與せざりしを論へるはまた趙翼の一見識にほかならず。かれとこれと兩見識いづれ中れりやはにはかに定めがたけれども、陳壽の評語の邪まなる私の怨みによれりと思ひ定めてその心術をひとへに貶めむは誤れりといふべし。

元康年間に陳壽のみまかりしとき、范頽等のなせし上表、その本文さながら晉書本傳に載れり。そのすゑに

陳壽作三國志、辭多勸誡、明乎得失、有益風化、雖文艷不若相如而質直過之。

と記せるはいとも言短なれども、陳壽の類まれなる史筆の要かなめを捉へえたり。司馬長卿との勝り劣りはいかにもあれ、范頽等の云へることほほ肯綮に中れりとや云ひつべからむ。

三國志成りしとき、その敘事のいみじきを嘉して時の人の良史の才ありと云ひて稱へしことすでに上に云へり。陳壽の敘事には權貴に憚りてわざとおぼめかせしところなきにもあらねば、その直筆もてつひに命を殞せしかの古への良史薰孤にはさすが比ぶべくもあらねど、その史筆のいみじきはなほざりの操觚さうこ者流のえ及ぶさかひにあらざること否むべくもあらじかし。

(令和五年十二月二十日受附)